

予備知識の少ない Discourse Analysis ～話し言葉と書き言葉双方の観点から～

佐々木 雅剛

1. はじめに

自分がこの研究をやろうとするきっかけとなったのが、「話題の転換によって、発信側と受け手のそれぞれの背景にはどんな知識が存在し、お互いの理解にどのように関わってくるか」ということの重要性である。よく自分の友人に言われるのだが、自分の使っている言葉自体を文章にしてみた場合、全く意味をなさない、支離滅裂とした文章になることから、自分自身、どうやって他人を理解し、他人に自分を理解させているかという問題を詳しく研究してみたいということから Discourse Analysis の分野を選択した。この分野において、話し言葉についても強い興味を示したのだが、書き言葉の Discourse において、「異なる2つの話題を提示されたらどうなるか。」という問題に思い切り悩んでしまったのである。日常話しているだけでは全く気づかなかったことが、書き言葉にした途端、目で見るといっても、普段とは全く異なって見えるのである。それについて、修士論文を書くための第1ステップとして、この論文を書く動機となったのである。

2. 書き言葉と話し言葉におけるそれぞれの Discourse

Discourse Analysis とひとことに言っても、それには莫大な種類が存在する。まずこの章で私が注目したいのが、話し言葉と書き言葉におけるそれぞれの Discourse である。次の章で述べる、2つについての Discourse の比較もそうだが、私にとって非常に興味深いテーマとなったのだ。なぜならば、話し言葉においての実際に会話を行っている当事者間に働きかけている背景知識 (Background Knowledge) と、書き言葉において表面的に述べられている意味との違い、また、話し言葉においては発信者の発し方や受け手の受け方によってもかなり違ってくるのであるのに対し、書き言葉においては書かれている言葉は不変であるにもかかわらず、読み手自身に働きかけるいろいろな要因によって解釈が多様に分かれてくるからである。書き言葉そのものは何ら変わらないが、解釈の時点においてなんらかの付加要素を付け加えて解釈することもあり得る。例えば、あまりその事象について詳しく知らない子供と、それについてある程度の知識を持った大人とを比較してみると一目瞭然である。子供は事象をただの出来事と捉える一方、大人は理論を立てて説明したり、解釈したりする。又は説明がつかなくなると、

何かおかしいということにも成り得る。

下記の2文を考えてみる。

①Ken was very tired because of hard work.

②John kicked the ball.

ここに表面上現れているのは、①と②の2つの文である。当然、子供の解釈にしてみれば、「ケンはずっと仕事のせいで疲れた。ジョンがボールを蹴った。」という、文字通りの解釈くらいをしてどういう文脈であるかということまでは理解しかねる、といった感じである。ところが大人が解釈をすると、これを自分が体験したことのあるあらゆる知識や事例などに当てはめて検証し、分析してみることもある。言い換えれば、自分の持つスキーマ (Schema) に照らし合わせ、①と②の間に存在する関係性を探し出しているのだ。そして例えば、「ケンはずっと仕事で疲れたが、サッカーの試合があるので出なければならない。そうだ、ジョンに頼んで試合に出てもらおう。そして試合でジョンがボールを蹴った。」という解釈も出来るかもしれない。また、あるいは「この文は互いに関連がない。」と断定してしまう、つまり、①と②の文はそれぞれ独立した意味を持っていて、互いに独立しているという解釈もできるかもしれない。前者の解釈においては、2つの文の間に何らかのつながり (Coherence) を見出そうとしている。しかし一方で後者の解釈では全く方向性の異なった2つの文と捉えているのである。いわば、2つの文の間に関連性がないということなのである。ここで、前者の解釈における太線の下線部に注目してみる。下線部は、例に述べた2つの文には全く表れていない事柄である。ではその概念はどこに由来するものなのか、ということが疑問となる。当然記されている本文には見えてはいない。よって、大人が体験したことのある経験から派生している背景知識等に基づくものだと考えられる。この部分が、人によって大きく異なる。生活様式や慣習、門地・性別など、それに関わってくる要素は多種多様にわたる。

書き言葉において、こういった物の考え方を捉えるのはあまりに選択肢が広すぎて非常に捉えづらい。逆を言えば、会話 (話し言葉) における Discourse は聞くことに主題があるので、ほとんどの場合、会話を行ったり聞いているだけでもある程度は理解可能なのである。もちろん、この場合においてもスキーマは働きかけるのだが、ふだん我々は日常生活の中で会話におけるスキーマがすぐに活性化できるようになっているのでそんなに気を配る必要がないのである。次の章で詳しく述べるが、ここで1つ具体例を挙げてみることにする。

ここで日本語での会話の実例を考えてみる。(会話なので、状況を少し付け加えておく。)

教室内で、ドアが開いている。

A: 「Bさん、寒くありませんか。」

B: 「ドア、閉めましょうか。」

この対話において、AさんがBさんに「寒くありませんか。」と問い掛けているのは、Bさんが寒いとかということとは別にこれといった関係はなく、要はBさんにドアを閉めてくれというお願いをしているのである。Aさんの発言は言葉通りの意味を実際には言っていないが、Bさんは自分の持ついろいろなスキーマを当てはめて検証した結果、Aさんは寒がっているからドアを閉めてということをお願いしているのだな、ということに気がついて、Aさんに対して「ドア、閉めましょうか。」という返事を返している。この二者の間には、『教室のドアが開いているので寒い→ドアを閉めて欲しい→ドアを閉めましょうか』という Discourse が存在する。これの存在によって、この会話は前後の文において首尾一貫性 (Coherence) を持ち、全体に結束作用 (Cohesion) が働いて会話が成立する。

さて、話を書き言葉に戻してもう一度考えてみる。書き言葉というのは、背景知識が少なければ少ないほど理解がかなり難しいものである。また、それを埋めるためにあらゆるスキーマを活性化させて理解しようとするので、場合によっては全く趣旨の違う解釈をする可能性もある。

以下の例文を考えてみる。

① The knight killed the dragon. He cut off its head with his sword.

② The knight killed the dragon. The pineapple was on the table.

Cook (1989)

この二つについての Discourse Analysis を行うとすれば、まず、①において、「その騎士はドラゴンを殺した。彼 (その騎士) はそれ (ドラゴン) の頭を持っていた剣で切り落とした。」となり、騎士がドラゴンをどうやって殺したかという詳しい説明が2番目の文で述べられており、前後の文がある共通の話題 (騎士がドラゴンを殺した) が根底にあることによって、①は首尾一貫していると言える。しかし、②はどうであろうか。文を見て分かる通り、②において2つの文の間に存在する Discourse を発見するのは困難である。語彙的・文法的には間違っていない

し、それぞれの文ではきちんとした意味を持っている。だが、2つの文が結束構造を持つための要素が表面には見当たらない。そこで、読み手はこれまでの自分の経験などに基づくいろいろな背景知識を駆使することによってなんとかこの2つの文の関係を見出そうとして Discourse Analysis を行うが、「その騎士はドラゴンを殺した。」という文章と「そのパイナップルはテーブルの上にあった。」という文章との間に何らかのつながりを見つけ出せる読み手はきっと少ないであろう。ここで筆者は想像を駆使すれば、「例えば非現実の世界(おとぎの世界)において、その騎士はドラゴンのいる洞窟に潜む魔法のパイナップルを探していて、そこで運悪くドラゴンに遭遇し、もはや逃げるわけにもいわずに殺し、テーブルの上にある魔法のパイナップルを手に入れた。」というような状況推測もできないこともない、と言っている。これを見る限り、明らかに②の2文からこのような状況を読みとることがきわめて困難であることが分かる。では、こういった状況を読みとることの出来ない読み手はどのようにして解釈するのであろうか。きっと意味が通らないので理解できないという読み手は少なくないと思う。

読み手の持つ経験は人によって大きく異なる。その上、働きかけるスキーマに関して言えば、次々とスキーマが活性化され、理解を進めていく人もいれば、ほとんどスキーマが活性化されないがために、理解に苦しむ人もいるのである。ここで、活性化されずに Discourse を理解しようとするのも困難である。書き言葉における Discourse 理解の難しさは、このような点によるものではないだろうか。次の章において私は、書き言葉と話し言葉における Discourse の比較を考えてみるものとする。

3. 書き言葉と話し言葉における Discourse の比較

話し言葉における Discourse の理解について自分は、グライス (Grice, 1975) による「協調の原則」から考えてみたいと思う。この「協調の原則」は会話において理想とされるものだが、実際の社会において、これに反していても会話は問題なく成立している。

グライスは、他人とコミュニケーションを図る際に必要な4つの原則を以下のように挙げている。

Quantity: Make your contribution as informative as is required, but not more, or less, than is required

Quality: Do not say that which you believe to be false or for which you lack evidence

Relation: Be relevant

Manner: Be clear, brief and orderly

Yule (1996)

Quantity、つまり「量」に関して言えば、「必要とされる情報を過不足無く伝えよ」となっているのだが、ここにおいて日本語の会話を考えてみれば分かるように、日本語の会話はこれに反している。遠回しな表現が多い、つまり言葉が多いのである。形式張った表現がその最たるものである。しかし、書き言葉で表せば全く意味を持たないようで邪魔な文章が、話し言葉になると会話場面の雰囲気を作る土台として効果を発揮したり、他人とのコミュニケーションを円滑に進めるための重大な役目を果たすこともある。これに対して、英語は逆である。必要とされることをはっきりと言う。それによって、自分の伝えたいことが過不足無く相手に伝わる事で会話が成立し、そこで Discourse Analysis がうまく行えるのである。もし多ければ分析が多岐に渡ってしまうし、不足ならば解釈が欠けてしまう。ちょっと本題からそれるが、青森地方の方言である「津軽弁」に次のような話し言葉がある。

「どさ。」

「ゆさ。」

たった2文字ずつのこの短い会話の中に、標準語でいえば結構な量になるくらいの意味を含んでいる。

「今日はお寒いですが、あなたは今どこに行かれるのですか。」

「あっ、今私はお風呂に行こうとしていたのですよ。」

多からず、少なからず、まさに話し言葉だけにおいての意味を持っているのである。ところが実際に書いてみても、「津軽弁」に対してあまり予備知識がない人は理解どころか、ひらがなの羅列にしか感じ取れないであろう。

次に Quality、「質」に関してだが、「嘘や信憑性に欠けることは言わないこと」となっている。話し言葉において、嘘をついているとまではいかないのだが、例えば、ときどき嫌なことに対して仕方なく肯定をしなければならぬ時など、この原則に反しているのではないだろうか。つまり、それは返答を曖昧にして「質」の変化を行おうとしているのである。において、書き言葉において「質」が変化することはなにかに記載されている文章を見たところではあまりない。受け手の

持つ知識などによって、「質」の変化をもたらすのである。

A: 「この意見はどうでしょうか。」

B: 「そうだな。前向きに検討してみよう。」

B は本来、A の意見を採り入れたくはないのだが、A の話の腰を折らないが為にわざと遠回しに言ったのであろう。しかし、これによって A が B の意見をそのまま鵜呑みにして、勘違いしてしまう可能性もある。返事を曖昧にして、「質」の変化を起こしているのである。

Relation、すなわち「関連性」についてだが、「関係している」ことが必要とされる。話し言葉において話題が逸れてしまうと、もはや Discourse どころではなくなってしまふ。話し手と聞き手が互いに当の話題について知っていなければ、会話は成立しないのである。しかし書き言葉においてはそうでもない。前章でドラゴンの話が出てきたが、書かれている事柄に対して関連性を構築していくのはそこに挙げられている事象ではなく、我々の経験などから発生するスキーマなのである。だから人によっては構築が異なってきたり、時には全く関連のない事柄が浮かび上がってくる可能性もある。

Manner、「規約」に関してだが、「はっきりと、簡潔に、順序よく話せ」となっているのだが、言葉を難しく話すことはないにしても、曖昧な表現は Quality のところにある例よりわかるはずである。しかし、いくら規約に反していたとは言っても意味が通らないわけではないのである。それぞれの持つ背景知識がある共通性を持っていれば、意味をとらえることが出来、理解が可能となるのである。

自分が Discourse について学んできたことは、まだまだおおざっぱな点である。特に、自分の発言や発話を第三者の立場から見れば、そこで新たな関連性が見つかるであろうと思っている。今はまだ研究を始めたばかりだが、来年度の論文にはもっと詳しく掘り下げて考えてみようと思っている。

参考文献

Cook, G (1989). Discourse. Oxford University Press

Yule, G (1996). The Study of Language. Cambridge University Press

Nunan, D. (1988). Syllabus Design. Oxford University Press

(岩手大学教育学部英語教育専修)